

東北公益文科大学

総合研究論集

17

文献でみる日本における街路樹の受容と展開

小林 丈一

文献でみる日本における街路樹の受容と展開

小林 丈一

一、街路樹と日本人

街路樹は、現代のまちづくりにあつては、その一翼を担う重要な位置を占めるに至っている。世界のまちまちでは、例えば住宅街などでは、街路樹の有無や良否がより良いまち、より良い暮らしを判断・評価する尺度やシンボルの一つにもなっている。

しかるに、日本では街路樹が現代のまちづくりに必須の要件とまでは、まだ受け止められていない。主として短期的視野に立つ経済的理由により、街路樹のある通りは贅沢といった認識がなお根深く残っている。市町村の絡む第三セクター方式の住宅（街）づくりでも、街路樹のないまちづくり・道路づくりが多いが、その理由の最大なものは、コストが高く、贅沢という認識である。五〇年先、一〇〇年先を見る視点に欠けるのである。

このように現状では、なお美しい街路樹を日々の生活のなかで自然に楽しむという、街路樹の日常化までには、かなり距離がある。それにあわせて、市民でも街路樹の有無や成育状況には、それほど関心を示さないものがなお少なくない。

実際に、まちづくり・道路づくりでは、最初から街路樹は計画から除外される例が今も少なくない。街路樹が植栽された場合でも、成育状況からみて、土地・土壌に合わないとか、十分に保護・管理をしなかったとかで、成育していない例や失敗している例も、しばしば見られる。そのため、せっかく植栽された街路樹が、良い景観や良いまちの雰囲気の出出に寄与できていない例もみられる。しかし、国際的には、あるいは専門家の間には、街路樹はより良いまちづくりに、さらにより良い暮らしにプラスの役割を果たすことは、共通の認識として受け止められるようになってきている。

また、近代の都市づくりの条件には、経済的活性化や効率化・利便性に加えて、生活環境・公衆衛生の健全化、災害対策やセーフティネットづくりによる安全・安心の確保、具体的には都市の膨張の抑制、公園や緑地帯の整備、文化・伝統の維持・保存、ゴミをなくす運動といった環境や景観の美化（快適性）など多様な要件が挙げられるようになってきている。高速道路づくりやビル・ラッシュにおいては、安全や安心、また緑を含む美観や環境が犠牲になってきたことへの反省もみられるようになってきている。

日本のまちづくりでは、ただちには経済的活性化にはつながらないという理由で、快適性を求めて環境や景観を美化することよりも、どうしても商店街の活性化、工業団地の整備といった財政や生活に直結する経済的な要件・側面の方が優先されがちであった。また市民も、まちづくりよりも自分の持家づくりに打ち込むのが精一杯であった。環境や景観の美化・整備に対する価値は、主観的な判断に頼るところが多く、全ての人が揃って評価、要求するまでには至っていなかったのである。そのため、具体的に基準を決められず、快適性にかかわる要件は、まちづくりでは後回しにされがちであった。^{1 2}

それでも、ようやく近年に至って、まちづくりでは街路樹も明快に視野に入ってきた。きれいな街路樹のある通りや地域は、ゆとりや景観面から高い評価を受けるまでになっており、経済的な事情が許せば取り入れたいという認識が主流になりはじめている。

街路樹は、まちとまち、通りと通り、また森林や里山などとまちを結ぶ緑の列である。街路樹は、森や林のように密集してはいないものの、一列に伸びた「長い森」という認識も存しており、森林の親戚といったイメージである。

森や林となると、日本では昔から比較的身近にあるイメージが強かった。神社や寺院の森は、子供たちの遊び場であった。規模は大小様々であったが、一般市民も日常的に触れ得るものであった。実際に、まちや集落には神社や寺院を囲む森があった。鎮守の森と呼ばれるその空間は、信仰の対象であり、祭礼や行事が行われるところであった。同時に、住民の交流や遊びの場でもあり、公共的な緑地に近い存在だった。鎮守の森は、かつては日本人の精神形成にも、大きな影響を与えてきた存在であったのである。⁴ 原植生（人間が手を加えたり、影響を加える直前までの植生）は、日本はもとより、地球上においても極めて限られた地域にしか現存していないが、鎮守の森を見れば、その土地に長い間存続してきた樹種が分かる。つまり、鎮守の森は自然林として地域性をもって生き続けてきたのである。

さらに、生活空間を囲む林といえる屋敷林は、もともと身近な森や林であった。屋敷林は、地主や資産家の家に主にみられるものではあったが、屋敷を風雪から守ると同時に、大人や子供たちの仕事や学校に行く日々の通り道の街路樹代わりにもなった。集落全体をさわやかに彩り、のどかな雰囲気を守ったのである。

このように、個々の屋敷に属しているはずの屋敷林は、集落の外から見ると集落全体の中心にあって、集落を象徴する集落林のように見えたり、街路樹の代わりをしている場合もあった。屋敷林の外には、鎮守の森のような小さな森がいくつか点在しており、里山など村外の森や林へつながっていった。庄内地方を例にしても、田んぼを中心とした広大な平野部のあちこちに点在する集落林は、同地方の風景に味わいを深め、和みを与えてくれる主要な要素でもあった。

先人たちが守ってきた森や林を、まちへつなぐのが街路樹の役割の一つである。先に述べてきたように、日本では街路樹の受容や推進では遅れていたが、森や林は多くの人たちに親しみのあるものであった。街路樹が日常的でなかったということは、実は、身近にあったはずの森や林に対しても多くの市民はゆっくり味わったり、観賞するゆとりが少な

かったということでもある。森や林は、いたるところにあった。にもかかわらず、それを十分に享受できなかったところに、日本のまちづくりの大きな限界や課題の一つも存していた。

森林や花々を受けとめ、味わうようなゆとりが出てきて、はじめて街路樹も、そのあるまちづくりも積極的に受容され、重視されるようになる。日本のまちづくりの現状は、そこまでは、もう少し距離があるのが現状である。しかし、そこに向かって進み出していることも間違いない。

二、街路樹のある街並みに惹かれた人たち

(一) 街路樹を題材にした詩や歌

街路樹とは違うが、その親戚ともいえる森や林が、上記にみたように、日本でも田舎のみか都会でも日常的に触られる時代があった。田舎はもちろん、都会でも人工の公園とは別に屋敷街、神社や寺院が目立ってみられ、そこに森や林があった。少なくとも、第二次世界大戦前と、終戦後しばらくはそうであった。

そして、森や林の保存・保護に関しては、意外に古くから言われてきた。不抜の森のような発想は、江戸時代から見られた。また明治以降になると、農商務省山林局長を経て沖縄県知事になった高橋琢也が著した『森林杞憂』（高橋蔵版、一八八八年）や、地理学者だった志賀重昂の代表作『日本風景論』（政教社・文武堂、一八九四年）などに見られるように、森や林の枯渇や被害を憂い、保護の必要を訴える視点から森林を観察するものも見られるようになる。⁵

森や林が、著作や雑誌の標題としてよく使用されるようになるのは大正以降のことである。白日社を創立して明星派

に対抗し、自然主義歌人として出発した後、自由律短歌を提唱した前田夕暮の『深林』（白日社、一九一六年）、『原生林』（改造社、一九二九年）、また詩誌『森林』（森林社、一九二二年）などの創刊も大正以降である。

それに比して、並木や街路樹が日常的にみられること、さらにその積極的拡充や保護を訴えることは、そう古くからみられたことではない。並木や街路樹が、短歌や詩に読み込まれたり、また著書や論文などの名称として著作の中の一つの章や節レベルで取り上げられるのは、いつ頃からであろうか。

短歌や詩などの創作にも、並木や街路樹が目立って出てくるのも大正以降であろう。生活派的・社会主義的な傾向をもつ歌誌を出し、アナキズムに近接することもあつた西村陽吉は、『街路樹』（東雲堂書店、一九一九年）などで街並みや街路樹への関心を早くから示していた一人である。この西村の『街路樹』は、単行本に街路樹の名称が使用された最初である。彼は、大正五年に、三行書きの処女歌集『都市居住者』（東雲堂書店、一九一六年）を世に送り出すが、そこでも「川岸の、冬の並木の下ぐらく、秋風吹くに行き逢ひしかな」「女ゆく、銀座の夜の葉柳に、蒼く光りて夏の星あり」などと、街路樹・並木をしばしば詠んでいた。

他に、詩集など文学作品には、森脇達夫、福本忠雄、中勘助、関根文之助らにも『街路樹』の著作がある。

庶民的な歌謡曲、あるいは著作などに並木・並木路が目立って出てくるのは、もう少し遅く、昭和の初め頃からである。昭和に入ると、やや懂れぬな気分を込めて、西欧的な雰囲気や漂う並木路が歌謡曲の歌詞にも目立つようになってくる。

例えば、昭和四（一九二九）年にヒットした「東京行進曲」（西條八十作詞・中山晋平作曲）には「昔恋しい銀座の柳——」と歌われ、昭和七（一九三二）年の「銀座の柳」（西條八十作詞・中山晋平作曲）には「巴里のマロニエ、銀座の柳」と歌われた。また昭和九（一九三四）年の「並木の雨」（高橋掬太郎作詞・原野為二作曲）では、「並木の道に雨が降る——」などと並木・並木路が叙情的に歌われ、戦後まで広く歌い継がれてきた。その他、昭和一二（一九三七）年の「マロニエの木蔭」（坂口淳作詞・細川潤一作曲）などのヒット曲が続く。いずれも、まだ日常化されていない並木・街路樹を、

一種の憧れに似た気持ちで歌い継ぎ、受け止めてきたものである。

(二) 街路樹と建築・森林専門家

資本主義初期であれ、まちづくりが存在すれば、並木・街路樹に対する関心・研究もあってよさそうに思える。しかし、日本では、まちづくり・建築の専門家や行政関係者が並木・街路樹に本格的に目を向けるのは意外に遅かった。もちろん、大都会のセンターエリアなどは例外で、外国の都市に倣ってマロニエ、柳、桜が道路に植栽されることはあったが、広く一般化するものではなかった。

戦前の専門研究者による機関誌や論集を見ても、また行政が営林局や山林部局などで発行した報告書・計画書類を見ても、並木・街路樹を主目的に取り組んだもの、まとめたものはまず見られない。保護林や巨木などへの関心は、各地の営林局を中心に行政にも研究者にも早くから見られるが、並木・街路樹レベルまでにはおりにこなかった。

例えば、まちづくりの先駆者として後世に名を遺す黒谷了太郎、石川栄耀なども関わった『都市創作』（都市創作会、一九二五年）は、まちづくりでは大きな役割を担った機関誌である。大正一四（一九二五）年九月から昭和五（一九三〇）年四月までの五年近く月間で刊行されたが、そこでも、道路や公園は関心事の一つになって論文類も寄せられているのに、街路樹は付随的に触れられることはあっても、主たるテーマとして取り上げられたり、整理されることはなかった。黒谷のような優れたまちづくりプランをまとめた人でも、山林や緑、また道路には大きな関心を持っていたのに、並木・街路樹には付随的にしか注意を向けていなかった時代であったのである。

また、都市問題について旺盛な言論活動をし、キリスト教社会主義に沿った社会運動も展開した安部磯雄に目を向けても、彼は議論の中で都市における道路の役割を重視し、舗装や清掃などによる美化には力点を置いている。彼自身、街路樹にまではそれほど注意を向けていないものの、『応用市政論』（有倫堂、発行年不詳）において「道路の両側に樹

木を植ゆるが如きは未だ我國民の考へざる所⁷であると指摘している。ただ「都市の修飾」の視点から「樹木を植ゆべし」と、都市生活における樹木の役割を重視したことは留意されてよい。都市の樹木は、砂漠のオアシスのようなものであるとも例え、併せて健康上の視点からも言及している。

そういった中で、やはり忘れてはならないのは、森林や都市計画を専門とした本多静六と、土木工学者として日本における道路研究の先駆者である君島八郎の街路樹論である。本多については後述するので、ここでは君島についてのみに取り上げることにする。

君島は、道路全般にわたって先導的に深い研究をなした後に、九州帝大教授になった人物である。例えば『道路学一斑』（博文館、一九〇二年）は、その代表的な成果である。ただ、彼の場合も、道路をあらゆる角度から研究しているが、もともと弱い側面が、街路樹と比べてよいほどである。

「それでも同書、第十八章「維持修繕、清掃、撒水、並木」および付録（内務省訓令第十三号）第六章において「並木」を章の表題に取り入れて検討している。ただし「並木は多少の害あるにせよ其の利益あるものたるは明かなり」という説明程度で、それ以上掘り下げてはおらず、並木を重視していたとはいえない。しかし、やがて並木が重視される時代に向けての基礎的問題提起は行なっていたのである。

なお参考までに言及すると、大正九（一九二〇）年にローヤル・デクソンおよびフランクリン・フィッチ著『森林ロマンス』（日本評論社）が相場久江訳で刊行されている。森林論を、やや観念的に展開したものであるが、森林を重視する「林木都市」を提唱している。残念ながら、まちづくりや都市づくりの目的や実態は、明快には示されていない。また、街路樹についても「華盛頓のモールの如きは、林木より成る偉大なる並木路となった」という程度のことを説明するのみである。

他に、三浦伊八郎が『並木』（東京雄山閣、一九二八年）を、井下清が講演記録『街路樹』（東京市政調査会、一九二五年）

および『緑地生活』（羽田書店、一九四三年）を残している。単独で取りあげるに値するものなので、次の機会に改めて取りあげることにしたい。

三、街路樹論の登場とその先駆者たち

並木・街路樹に関する文献としては、意外に専門家以外の人たちの論文やエッセーに注意すべきものが少なくない。実際に、並木や街路樹が活字や用語として触れられるのは、森林や建築の専門家や専門誌ではなく、先にみた庶民が聴き、歌う歌謡曲、あるいは短歌・俳句などにおいてであった。並木・街路樹は、まだ日常的には手が届かないが、それだけに叙情や憧れの気持ちを込めて聴き、歌ったものである。

また、論文や覚書・エッセー類でも並木・街路樹については、むしろまちづくり・建築の専門家でない人たちが取り上げたのが注意を引く。実際に、まちづくりと十分に重ねあわせる視点からのものだけではないが、大正以降になると並木や街路樹にふれた文献で、いくつか注目すべきものが出てくる。比較的まとまった内容の街路樹論で、私が確認できたのは、専門家といえる本多静六を除くと、島華水、中村星湖らのものである。いずれも、何らかの形で欧米諸国にみられる街路樹の素晴らしさに誘発されたものである。

まず本多静六であるが、彼は大正六（一九一七）年に大衆総合誌に「樹木と人生―樹木が人生の与ふる九大恩恵―」（『日本一』第三卷九号、南北社）と題するエッセイ風の論文を書いている。同論は、街路樹のみの恩恵・功罪をみているわけではない。とくに都会における「市街地における立木の効用、すなわち市街における樹木と人生との関係」について広く論じたものである。そうはいつても、その論文では、樹木という用語のほとんどすべてを街路樹に置き換えて

もよい内容である。

本多は、東京帝国大学農科大学教授として、森林や公園づくりで活躍した。ドイツに留学した後、日本初の林学博士となった。国立公園設立に尽力したほか、日比谷公園や明治神宮など、各地の公園や庭園を設計した。『森林家必携』（早稲田農園書籍部、一九〇四年）のような森林に関する年報や事典としても使える著作も編集している。

このように、樹木や森林を専門としていた本多は、街路樹をも想起させるように樹木と人生・生活について紹介した。ここでは、都会における樹木の効用として、一、気候を調和し温度を平均化する作用。二、多量の水分を蒸発させ湿度を調節。三、有害な炭酸ガスの分解と酸素の供給。四、人に有害なばい菌の殺傷と人の呼吸に有益な作用。五、湿度の調節により地面を新鮮な状態に保存。六、地表物の腐敗作用を減じたり肥料を提供したりして土地を清浄化。七、塵芥など汚物の悲惨を防ぎ伝染病の流行を抑制。八、煤煙塵芥のろ過と空気の清浄化。九、風致の増大、神経の沈静化による人身の温和化。といった九点に整理している。

また本多は、市街地の樹木が無くなっていくことを危惧しており、樹木を失って荒廃した諸外国の実例を挙げながら、人間が樹木からいかに恩恵を受けているかを力説している。他に『本多造林学』（三浦書店、一九〇九年）などを著した。ついで、島華水（文次郎）による「牛津の並木路」〔表現〕創刊号、二松堂書店、一九二一年）がある。華水は長崎県出身で、京都帝国大学（当時）文学部教授として新聞や雑誌等でも、しばしば文学論やエッセーを発表していた。

彼は、ヨーロッパ諸国を訪ねた折、イギリスのオックスフォード（牛津）の並木路に関心をもち、それを「牛津（オックスフォード）の並木路」としてまとめた。この中では、英国都市の中でも、最も古い歴史を有するオックスフォードの並木路は、学生が勉学の合間に逍遙するためにつくられたものであり、四、五百年前の古い図にも描かれていたことなどが紹介されている。また、仏国の並木路がモデルになってから、各国の新興地や住宅街では並木を植栽することが必須の条件になったことや、植民地においても同様に並木を植栽することになったことも指摘している。その上で彼

は、多くの国々を見てきた中で、パリの並木がもつとも素晴らしいと絶賛している。ところが、その一方「藤栗毛の自分等には牛津の（中略）散歩道が矢張り一番適して居る」¹⁰と、文章を締めくくっている。

さらにまた、中村星湖が『文化は郷土より』（大智書房、一九四三年）において「街路樹の話」（この章は昭和一〇（一九三五）年に執筆されたものを同書に採録したものである）という一章をもうけて、一六頁ほどにわたって街路樹について論じている。

彼は、自然主義系の作家、翻訳家として名を成すと同時に、民衆芸術や農民文学にも興味を示すなど、博識家としても知られていた。この広い知識を基にまとめられた「街路樹の話」は、戦前に書かれたものでは、本格的に街路樹論を展開した極めて珍しい例の一つで、興味深いものがある。

ここでは、中村は外国の街路樹を念頭におきながら街路樹論を展開している。彼は、一年ほどパリに滞在しており「市街の美しくしさでも、街路樹の美しくしさでも、巴里が第一等」¹¹「春、夏、秋、冬の巴里の街路樹を見て、それに比較すべき物はない」¹²と、華水同様にパリの街路樹を高く評価し、「十人が十人、ヨーロッパの諸都市を見た人の同意する所だらう」¹³と、その評価が自身の主観だけではないことを述べている。

それだけに、帰国してすぐに見た東京の街路樹に対しては「貧弱でとても見られない、ただ外国の町の街路樹の下手な真似に過ぎない」¹⁴と酷評している。当時の東京は、西洋風（特に米国風）の喫茶店、酒場、ダンスホールが増えて、ネオンサインが明滅し、自動車の往来が増え、洋装が板についてきた時代であった。

ところが、時を経て見渡してみると、まちや道路によつては街路樹が成長して「実用と装飾の使命を果たすように」¹⁵なったり、街並みを美しく快く眺められて心に安らぎまで起こり、美に打たれたりするほどになった。そして、近代的な真の文化は「贅沢な建物などで代表されずに立派な街路樹で代表されなければならない」¹⁶と、東西の都市を見てきたが故の、街路樹の役割を重視する先駆的な意見を述べている。

基本的なことでは、「並木」と「街路樹」は少し違った意味を持っているが、古くは「並木」といわれ、「街路樹」と呼ばれるようになったのは明治の後半から大正に入ってからであったことや、また東京市に西洋風の街路樹が植えられたのは明治三七（一九〇四）年であったことも、中村は明らかにしている。

さらに、中村は日本で最初に街路樹に注意を払った文学者は、島崎藤村ではなかったかとも述べており、短編小説『並木』（『藤村集』博文館、一九〇九年）が、それであると紹介している。その『並木』は、濠端の柳並木を「同じような高さに揃えられて、枝も葉も切り捨てられて、各自の特色を延ばすことも出来ない多くの柳」¹⁷などと、並木を積極的に評価したものではない。しかし、短編とはいえ、小説の標題に並木を使用した最初のものであり、看過されてはならない。

その他、藤村の作品中では『柳橋スケッチ』（『藤村全集―第八卷―』藤村全集刊行会、一九二二年）で「柳並木」という章を設けているし、長編小説『新生』（春陽堂、一九一九年）や、『桜の実の熟する時』（春陽堂、一九一九年）にも柳並木への言及がみられる。

なお、画家の平福百穂が『中央公論』夏季特別号（一九二九年七月号）に、「並木」という絵を寄せている。並木について文章を付しているわけではないが、この時代に自らの絵に「並木」の表題を付していることには注意をひかれるところである。

四、結びに

以上からもうかがえるように、第二次世界大戦前は、街路樹論が広く展開されるといった状況ではなかった。それを反映するように、戦前に街路樹について触れたものには、かつて市民が田園・郊外に抱いた感慨に似て、何となく爽やかなもの、新鮮で憧れを抱かされるものといった情緒的な受け止め方が先行するものであった。いふなれば、戦前にあつては並木や街路樹が、日本人の生活には日常的にはまだ入り込んではいなかったのである。普段の生活の中では緑を楽しむゆとりがなかったことの反映でもあつた。それだけに、まちづくりにあつては、並木や街路樹は、遠い欧米諸国のまちを見るように憧れの気持ちで受け止められるだけで、一般的には日常的視野・実用的視野では受け止められるに至らなかつたのである。

もつとも、戦前、特に明治・大正の頃には、まちづくり・建築の専門家でさえも、井下清や三浦伊八郎を除くと、並木・街路樹に大きな関心を示した人は稀であつた。賢明にも並木に目を向けた安部磯雄、君島八郎、本多静六らでも、紹介や感想を少しだけ超える程度の並木・街路樹論であつたことは、先に見た通りである。並木・街路樹が、専門家も含め、広くに視野に入り、研究的なものが登場するのは第二次世界大戦後に至つてからである。巻末に挙げた参考文献からもうかがえるように、さらに本格的な論議は、むしろこれからである。

謝辞

本論文の作成にあたり、指導教授である小松隆二先生より多大のご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。

脚注

- 1 加藤晃・竹内伝史『新・都市計画概論』共立出版、二〇〇四年、五〇頁
- 2 ②.ペングループ『期待される新しい都市地方づくり』三修社、一九七九年、二六頁
- 3 小松隆二『公益とは何か』論創社、二〇〇四年、二五九頁
- 4 湯川洋司他『日本の民俗―山と川―』吉川弘文館、二〇〇八年、四〇頁
- 5 小松隆二『公益とは何か』論創社、二〇〇四年、二六五頁
- 6 例えば東北でも、『十和田鳶八甲田保護林』、青森営林局、一九二七年。『秋田山形の老樹名木』秋田営林局、一九三五年など
- 7 安部磯雄『応用市政論』有倫堂、発行年不詳、五三三頁―五三四頁
- 8 君島八郎『道路学一斑』博文館、一九〇二年、二二〇頁
- 9 ローヤル・ヂクソン他著／相場久江訳『森林ロマンス』日本評論社、一九二〇年、三六二頁
- 10 『表現』創刊号、二松堂書店、一九二二年、九〇頁
- 1 中村星湖『文化は郷土より』大智書房、一九四三年、二四三頁
- 2 同右
- 3 同右
- 4 同右、二四六頁
- 5 同右、二四九頁
- 6 同右、二五二頁
- 7 島崎藤村『藤村集』博文館、一九〇九年、四六頁

参考文献

- 高橋琢也『森林杞憂』高橋蔵版、一八八八年
- 安部磯雄『応用市政論』有倫堂、発行年不詳
- 君島八郎『道路学一斑』博文館、一九〇二年
- 本多静六『森林家必携』早稲田農園書籍部、一九〇四年
- 本多静六『本多造林学』三浦書店、一九〇九年
- 西村陽吉『街路樹』東雲堂書店、一九一九年
- ローヤル・デクソン他著／相場久江訳『森林ロマンス』日本評論社、一九二〇年
- 井下清述『街路樹』（都市講話）東京市政調査会、一九二五年
- 森脇達夫『並木道』万生閣、一九二六年
- 『十和田鳶八甲田保護林』、青森営林局、一九二七年
- 黒谷了太郎『山林都市―一名林間都市―』曠台社、一九二八年
- 三浦伊八郎『並木』東京雄山閣、一九二八年
- 『秋田山形の老樹名木』秋田営林局、一九三五年
- 福本忠雄編『街路樹』街路樹詩社、一九三五年
- 中勘助『街路樹』岩波書店、一九三七年
- 関根文之助『街路樹』羊門社、一九三九年
- 中村星湖『文化は郷土より』大智書房、一九四三年
- 田中喜多美『岩手縣並木史』郷土研究学会、一九四七年

- 朝日新聞社社会部『並木道』鱗書房版、一九五六年
- 三浦伊八郎『並木』雄山閣、一九五八年
- 宮脇昭『植物と人間―生物社会のバランス―』NHKブックス、一九七〇年
- 桜井廉編『街路樹と並木』小学館、一九八六年
- 藤田昇『街路樹』東京都公園協会、一九八八年
- 亀野辰三・八田準一『街路樹・みんなでつくるまちの顔』公職研、一九九七年
- 渡辺達三『「街路樹」デザイン新時代』裳華房、二〇〇〇年
- 小松隆二『公益とは何か』論創社、二〇〇四年
- 『鶴岡致道大学―平成一七年度講義記録―』鶴岡総合研究所、二〇〇六年